

牛膀胱の平滑筋肉腫

酪農学園大学獣医学科病理学教室出類

第10回獣医病理学研修会 標本No.151

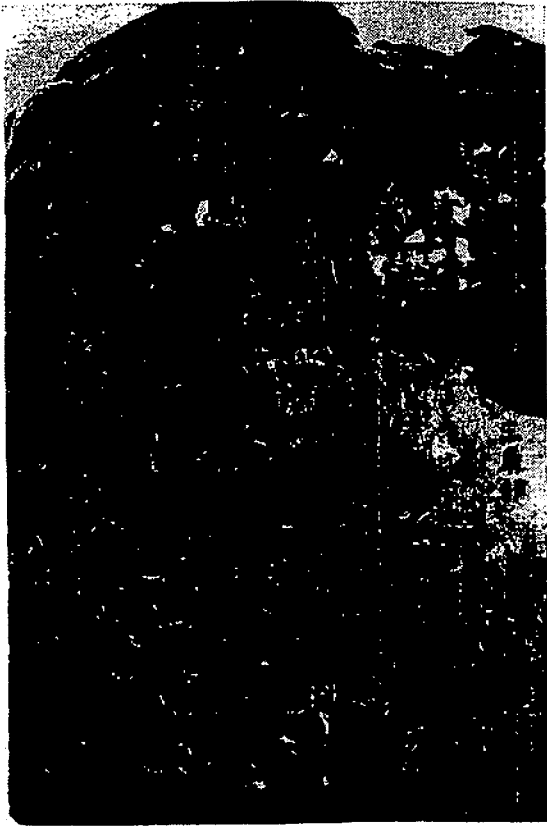


写真 1

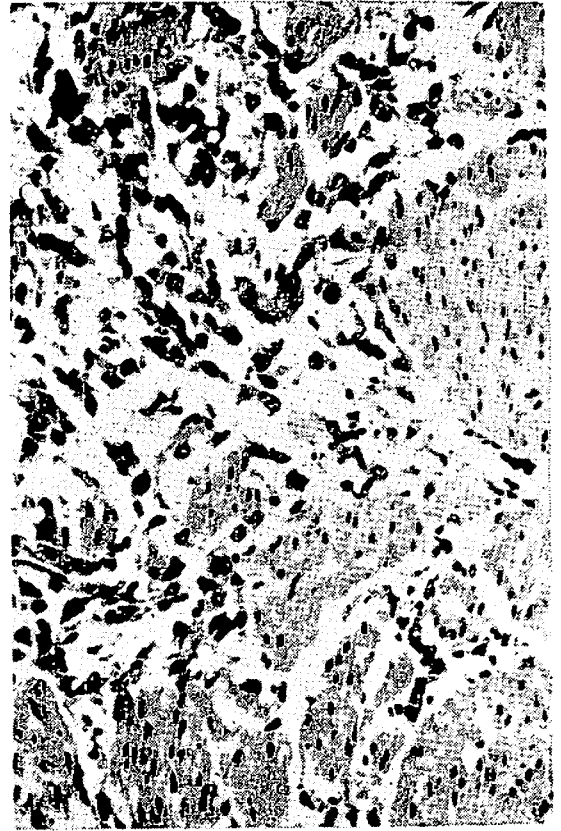


写真 2

北海道根室地方に地方病性に所謂牛の血尿症が存在する。その膀胱には炎症性的変化と共に種々の腫瘍が共存することが知られている：血管腫、腺腫、線維(肉)腫、平滑筋(肉)腫、移行上皮癌等。出題者は同地方より蒐集した膀胱腫瘍に、明らかな組織診断名を与え難い例を得たので、研修会にそれを出题し批判を願った。

ホルスタイン系、牝、8年3ヶ月今、中標津町にて飼養、'68年1月25日屠用屠殺。

臨床的：かなり以前に血尿排池を開始し、以後それを断続していた。'66年9月小型ピロプラズマ症を併発。'67年9月再び血尿を排出し始め、加療するも今回は血尿停止見られず、消瘦、貧血、歩様不確実と一般状態悪化。尿淋瀝、排尿時疼痛あり、尿中への血餅混入著しい。5月分娩予定であった。

肉眼的：膀胱尖より頸迄の長さ24cm、重さ約4kg、持参時既に切開されていたが、内外面共に血液を混えたクリーム様膿液にまみれ汚穢であったが、腐敗又は化膿臭は呈しなかった。壁は厚みを増していた。粘膜は三角部域において固有靨を保持していたが、その他の領域は

破れ易い波動感を呈する赤色乃至乳白桃色の小指頭大前後の隆起物を形成し、それらが融合したものは恰も氷の如くであった。(写真1) 割を加えると膿様の液が流出した。水洗すると腫瘍組織は疎鬆柔軟に退縮し、菲薄な粘膿と粘膜下に不規則に走る水腫性の線維性錯走物が残った。筋尺との境は不分明、若しくは筋尺への膿液の浸潤若明で漿膜面より波動を呈する部も存した。

組織学的：圧扁された移行上皮が内腔面に辛じて保持され、下織は疎開した血管結合織が支柱となり、その間を僅少の細網線維及び多数の膿瘍細胞及び赤血球が遊離性に充満する。腫瘍細胞は支柱組織に辛じて連続しているものでは不正星状又は紡錘形を、解離したものでは大きさ不同の球形を呈し、粗な核質及び豊富な弱エオジン好性の胞体を有する。多くの胞体に貪喰空胞及び赤血球貪喰像を見る。核分裂像及び変性像も多発する。原基組織として間葉系組織が大いに疑われるが、出題者は写真2 (H-E, X210) に見られる様な平滑筋周辺からの腫瘍細胞への移行像を重視して、平滑筋肉腫と診断した。